

深草瑞光寺所蔵『宗祖一代本尊鑑』(一)

—遠沾院日亨『御本尊鑑』との関連を中心に—

桑名法晃

一、はじめに

日蓮聖人は法華經の救済世界の顕現である大曼荼羅を数多く図顯し、札拝の対象として、また御守りとして、門弟に授与された。現在確認できる真筆は百三十余幅^①だが、日興の『白蓮弟子分与申御筆御本尊目錄事』に記載された日蓮聖人自筆本尊六十五幅の授与の事例からみても二百幅近くに上ることがわかり、その数は七百とも八百とも想定されている^②。

したがって、今に伝わっていない真筆が多く存するが、その欠を補うものの一つとして注目されるのが、先師の残された臨写本・模写本である。日蓮聖人真筆の大曼荼羅の相貌を具体的に知ることができ、極めて重要な資料といえる。

現在知られている主な先師の臨写本・模写本として、寂照院日乾

(一五六〇～一六三三)^③、遠沾院日亨(一六四六～一七二二)、真如院日等(一六五五～一七三〇)^④、本妙日臨(一七九三～一八二二)^⑤等の写本が挙げられる。これらの中でも臨写・模写の数が最も多く、一般に広く知られているのが、遠沾院日亨の『御本尊鑑』である。『御本尊鑑』は、日亨が身延山所蔵の日蓮聖人真筆大曼荼羅の内、由緒正しい二十四幅と中山法華經寺所蔵の内五幅、佐渡妙宣寺所蔵の内三幅、保田妙本寺所蔵の内一幅等の計三十四幅を臨写し、文永・建治・弘安と年次を追って収録したものである^⑥。明治の大火によつて身延山所蔵の真筆類が烏有に帰してしまつた現在、その相貌を窺い知ることのできる大変貴重な資料であり、特に近年までは、日蓮聖人が佐渡で『観心本尊抄』を著して以降、約百日を経てはじめて図顯された佐渡始頭の大曼荼羅の相貌を拝し得る唯一の資料として珍重されてきた^⑦。

さて、この『御本尊鑑』には、遠沾院日亨の孫弟子にあたる亨寿

院日観(一七五〇〜一八〇七)が身延山久遠寺所蔵の日亨の直筆をもつて臨写したとされる『宗祖本尊録』が堀之内妙法寺に伝わっている。身延山久遠寺所蔵の『御本尊鑑』には序文も奥書も一切なく、三十四幅の大曼荼羅のみが図顕年次に随つて配列されたものである。そのため、日亨が何時何処で何のために臨写したのか、本書の成立については知ることができないが、堀之内妙法寺所蔵『宗祖本尊録』の本奥書「身延山久遠寺第三十三世日亨上人正徳二壬辰年六月九日此巻御写被遊候也」の記述によつて、日亨六十七歳、正徳二年(一七一二)が、作成年時と定められている¹¹⁾。堀之内妙法寺本は、身延山久遠寺所蔵の正本に対して「広本」と称されるように、身延山久遠寺並びに諸山所蔵の大曼荼羅の臨写以外にも、日亨が書写した中山法華経寺所蔵の宝物目録をはじめ、身延山久遠寺所蔵の古記録等の写しが収録されている。したがつて、『御本尊鑑』の成立について知ることができるとともに、日亨の行跡を知る上においても、また近世中期における中山法華経寺所蔵の日蓮聖人真筆の大曼荼羅、身延山久遠寺伝来の諸記録等についても知り得る貴重な資料といえる。

このように、『御本尊鑑』(以下、身延山本を指す)については、堀之内妙法寺所蔵『宗祖本尊録』(以下、広本と称す)と併せ考えることでより鮮明となる点が少ない。しかし、その一方で、『御本尊鑑』と広本では大きく異なる点もあり、また広本自体の問題点も指摘されている。すなわち、前者については名称が異なる点、及

びその配列が著しく異なる点が、後者の広本自体の問題については、表題が重複していること、日観の日亨の写し以外に他筆の大曼荼羅類が付加されていることなどが挙げられる¹²⁾。特に『御本尊鑑』と広本とにおいて配列に錯誤が出来てしまった原因として、他書の混入が挙げられ、「亨師を深く敬慕する亨寿観師の写本宗祖本尊録は正本とともに価値あるものであるが、惜しむらくは後人正本の順序を記せざりし為め亨師の意図が不明になってまち／＼に編入してしまつたのではなからうか」と推定されている¹³⁾。

ところで、広本の本奥書には、先に挙げた「身延山久遠寺第三十三世日亨上人正徳二壬辰年六月九日此巻御写被遊候也」の一文に続けて、さらに次のように記されている。

同三十四世日裕上人^{ヨリ}江府^江被仰遺、正徳四甲午、正月来二月朔

日依 日裕上人尊意^ニ

同寺中山本房十九世本國院日義聖人^ニ写申様^ト

被仰付、同二月八日^ニ弟子某^ニ写様^ト被申付、九日^ニ廿六日迄

以上三通^リ奉写之

日裕上人^ニ巻指上^テ、山本房^ニ巻納之也

残而此巻^ハ某^ヲ為現当二世大願成就写置

正徳第四甲午歳二月二十六日奉写之、見静日禪^ニ敬白^ス

聖人系図ノ末、亨私^ニ云^フヨリ三丁不写之

八祥咒経ノ末、以上六十有之、是^モ不写^ス¹⁴⁾

これによれば、日亨の弟子でありその跡を継いで身延山へ晋山した日裕の命を受けた本國院日義が、さらにその弟子の見静日禪に本書の書写を命じた。日禪はその命によって三卷書写し、日裕、山本坊（本國院日義は山本坊第十九世）へそれぞれ一卷を納め、残りのこの一卷は自身の大願成就のために手元に置いたことがわかる。この日禪の書写奥書を広本が有するということは、これまで身延山所蔵の日亨の直筆をもつて臨写されたと伝わってきた広本が、日禪が自身大願成就のために写した一卷を底本として書写された、転写本であることを自ずと意味することになる¹⁵⁾。しかし、日禪書写の三卷はいずれも伝わっておらず、その存在も知られていない。

今回、筆者は、京都深草瑞光寺における宝物調査に参加する機会を得、そこで『宗祖一代本尊鑑』と外題に記された写本一冊を見出すことができた。そこには、見龍院日裕の自署花押とともに、本國院日義の自署花押が記され、日亨の自筆と極めて酷似した筆致で日蓮聖人自筆の大曼荼羅が書写されている。また、大曼荼羅のみならず、広本と同様に、中山法華経寺の靈宝目録、並びに身延山伝来の古記録等が収められている。さらには、日禪写本では写されることなく省略された二箇所についても記載がみられ、その内容を確認することができる。このような点から、瑞光寺所蔵本は、先に触れた広本以上に高い文献的価値を有するものといえよう。

そこで、本稿においては、従来未見の内容を有するこの新出の瑞

光寺所蔵本『宗祖一代本尊鑑』について史料紹介を行い、その中でも特に大曼荼羅書写部分について『御本尊鑑』及び広本との関連を中心に若干の考察を試みたい。

二、瑞光寺所蔵『宗祖一代本尊鑑』の書誌と伝来

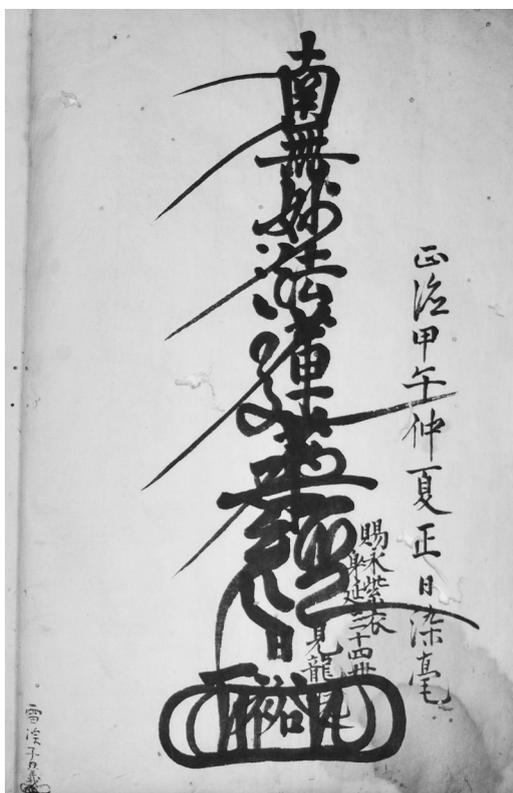
京都市伏見区深草に所在する瑞光寺は、草山元政（一六二三～一六六八）が明暦元年（一六五五）三十三歳の時、称心庵を結んだことに始まる、元政開山の寺である。元政の自筆本や手沢本、広く蒐集した蔵書、また元政の遺品をはじめ、歴代等の関係資料は、現在も瑞光寺において格護されている。収蔵状況については、村木敬子「瑞光寺所蔵古典籍資料調査について 附 同寺所蔵『亡羊子東遊記』―紹介と翻刻―」¹⁶⁾において詳細な報告がなされており、本調査では、資料の収納場所と形態によって所蔵資料が七つに分類されている。今回紹介する資料は「土蔵二階の四方に廻らされた書棚に収蔵される資料郡」である「B番号 約三二〇〇点」¹⁷⁾の内の一つ（B1736）である。

（一）書誌

瑞光寺所蔵『宗祖一代本尊鑑』（以下、瑞光寺本と称す）は、縦二九・九センチメートル、横二一・六センチメートル、袋綴じ一冊本で、茶色の表紙が付けられている。表紙は原装であるが、表裏と

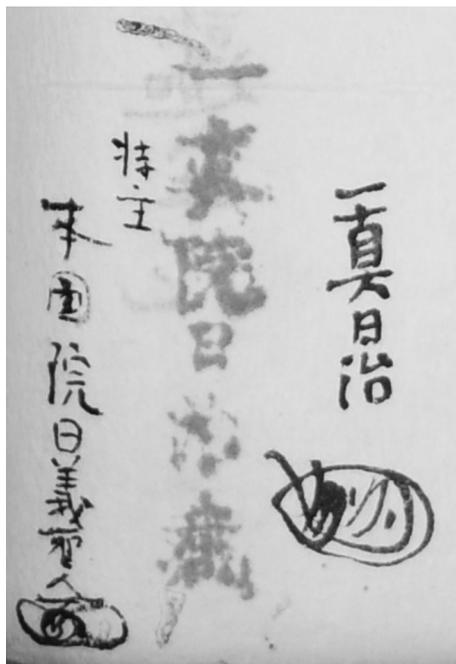
もに修繕が加えられている。表紙外題は、左上に墨書で「宗祖一代本尊鑑 全」と直書してあり、同筆で右下に「感應寺蔵」とある¹⁸⁾。内題・序跋はない。全三十九丁、墨付き三十三丁。本文は一筆。見返し・剝離部分の表紙側に「駿州安立院」の丸朱印（写真資料③）を、見返し背面には「一真院日治蔵」の朱印を捺す。表紙見返しには次の写真資料①のように、

正徳甲午仲夏正日染毫^(一七四)
賜永紫衣
身延三十四世
見龍院
南無妙法蓮華経 日裕（花押）



写真資料① 表紙見返し

と墨書され、左端に別筆で「雪溪子日義（花押）」と小書される。右の書き入れは、日裕の身延晋山約一年後にあたる正徳四年であり、日裕の自筆と認められる。これにより少なくとも瑞光寺本は正徳四年五月のこの時点以前の成立であることがわかる。巻末には、写真資料②のように「一真日治（花押）」「持主／本國院日義聖人（花押）」と墨書され、両者の間に、見返し背面部分と同じ「一真院日治蔵」の朱印を捺す。さらに、三十九丁裏には「本宗／向門統領／第四」の菱形朱印（写真資料④）が、裏表紙見返しには右端に小さく「雪溪子」の書き入れがみられる。



写真資料② 巻末

(二) 伝来

続いて、瑞光寺本の伝来について少しく確認していきたい。

まず、表紙見返しに書入がみられる見龍院日裕（一六六三―一七三七）は、字を好弁、後に龍海と改める。遠沾院日亨のもとで出家し、亨師の上足補処の人といわれる。飯高に学び、山科・水戸・飯高各檀林能化、京都岡崎満願寺二世、小湊誕生寺第二十七世を経て正徳三年（一七一三）六月五日師日亨の跡を承けて身延山に晋み、在山すること十五年、同十七年五月一円庵に退隠。元文二年一月八日、七十五歳をもって遷化した。⁽²⁰⁾『日蓮宗宗学章疏目録』によると、著作には、『亨師徳行記』一卷（日裕の弟子道樹日幹『小山茗話』に載す）、『文句講記』がある。⁽²¹⁾その他、日裕には師日亨の伝記を記した「身延山三十三世遠沾院日亨上人年譜」があり、本年譜は、谷中領玄寺の日亨の墓塔に刻まれているほか、岡崎満願寺所蔵の「遠沾院日亨上人画像」にも賛として書写されている。⁽²²⁾

これら日裕が著した師日亨の伝記では、師の功績を讃仰する中に、おいて、『御本尊鑑』に関する記述を確認することはできないが、先引の如く、広本の本奥書から、日裕は師の身延山所蔵の日蓮聖人真筆本尊を中心とする諸記録書写の事績を重視し、身延晋山後の正徳四年正月に本國院日義に本書の書写を命じた。結果として日義の弟子見静日禅によって三卷書写され、その写本が、日裕、日義双方の下へ届けられている。ここでは、日禅書写本とともに日亨自筆の正本も日裕の下へ戻ったことが推察されるが、表紙見返しの記事か

ら、日裕の尊意が達せられ再び手元に戻ってきた正本或いは日禅書写本に、日裕は首題とともに自署花押を揮毫し、それが本國院日義の所蔵するところとなったものと考えられる。瑞光寺本の構成については後述するが、基本的には広本と同じ内容を持ち、かつ日禅所持本で省略された二箇所についても瑞光寺本には記されている。日禅が、三巻とも同箇所を省略したのか、或いは日裕・日義贈呈本には省略することなく書写を行ったのかは定かでないため即断はできないが、広本の本奥書と瑞光寺本の見返し等記載の内容からは、少なくとも瑞光寺本が、日亨の自筆本、或いは日裕に贈呈された日禅書写本、このいづれかの可能性が極めて高いものと考えられよう。

雪溪子とは本國院日義のことである。『身延山坊跡録』によると、山本坊第十八世学禅院日逢の弟子、寂遠日通の門人であり、享保八年（一七二三）六月二十一日七十三歳にして遷化。大験者と記される。⁽²³⁾これによれば、日亨とは通師門下として同学にあたり、日亨より五歳の年少、日裕より十二歳年長となる。日義は師日逢の跡を承けて山本坊第十九世となっているが、在位期間は定かでない。奥野本洋「通師門人学禅院と身延宗徒」によると、「二十世妙光院日明の代に亘って庫裏の建立を正徳元年に完成させている」とあることから、正徳四年の時点ではすでに山本坊を退いていたこととなる。それ故、江戸へ仰せを遣わされたという記述になっているものがあるのか。いずれにしても、日禅は自ら書写した写本一冊を山本坊へ納めているが、瑞光寺本は一旦日裕の手元に渡ったものが、日義

の所持するところとなったものと考えられる。

この日義の弟子とされる見静日禅については、妙石坊祖師堂裏の歴代墓にある妙石坊開基学禅院日逢の墓石に、孫弟子の一人としてその名を確認することができる。⁽²⁵⁾ 広本の本奥書と併せて、本國院日義の弟子、かつ学禅院日逢の孫弟子ということがわかるが、詳細は不明である。

このように、見龍院日裕と本國院日義の署名花押をもつ本書は、その後、静岡感応寺第三十八世一真院日治の所蔵するところとなっている。

一真院日治（一七九七～一八八〇）は、字を巨舜といい、寛政九年（一七九七）京都に生まれた。十歳の春、鳥取県米子感応寺第二十三世心鏡院日通を師として出家、のち諸方に良師を歴訪して学行に励み、やがて飯高檀林に入った。以後、鷹峰檀林第三五二世、東京麻布妙像寺第二十世、京都岡崎本光寺、身延大乘坊第二十五世、



写真資料③



写真資料④

飯高檀林第三三八世を歴任し、静岡感応寺第三十八世となった。静岡感応寺では四十一世としても再任しているが、明治十三年（一八八〇）八月三十日、八十四歳をもって寂した。日治の事蹟については、自戒院日宣が記した「日治上人伝」⁽²⁶⁾ に詳しく、これによれば、日治は嘉永二年（一八四九）六月に静岡感応寺に入ったという。⁽²⁷⁾

表紙の「宗祖一代本尊鑑 全」「感應寺蔵」という墨書が誰の筆かは未詳だが、瑞光寺本に「一真院日治蔵」の朱印を捺すことから、日治の所持するところとなり、幕末から明治初期の段階では静岡感応寺に所蔵されていたことがうかがえる。それが、後に瑞光寺へと移り、現在に伝わっているのである。

静岡感応寺は、六老僧佐渡阿闍梨日向（一二五三～一三二四）を開基、行学院日朝（一四二二～一五〇〇）を中興の祖としている。⁽²⁸⁾ 日向が祖廟輪番給仕のために開創した子院を安立院（現、樋沢坊）と称したこと、⁽²⁹⁾ また日向自身を安立院と称したこと⁽³⁰⁾ から考えると、

瑞光寺本が有する二つの印「駿州安立院」⁽³¹⁾（写真資料③）、「本宗／向門統領／第四」⁽³²⁾（写真資料④）は、いずれも静岡感応寺を指すものとみてよからう。⁽³³⁾

では、如何なる経緯によって、一真院日治が静岡感応寺において所蔵していた本書が瑞光寺へと移ったのであろうか。瑞光寺における調査を続ける中で、その伝来について知ることのできる次の史料を見出すことができた。『唐人真蹟帖』（B3129）に挿まれていた日治の弟子

今井真澄による「明治三十八年九月廿九日」付の手記である。

艸山台巖老大和尚之御前マテ

- 一 宗祖一代本尊鑑 一冊
- 一 高祖先譜 一冊
- 一 仝 攷異 三冊
- 一 原稿統紀 一冊
- 一 録外微考 二冊
- 一 唐人真蹟帖 一折
- 一 推邪弁正録 二冊

メ 十一数」(第一葉)

先師一真院巨舜日治和尚満二十五回忌

ニ付紀念トシテ先師在世所持ノ書籍少々

御山主台巖老大和尚ノ猊下ニ備へ後ハ御執事ノ御計ヒトシテ御山内ニ納メ被下候ハ、野柄ハ勿

論故先師モ満足ニ思ハレント愚推仕恐々御

送付仕候間野柄ノ志願御允許有之度様御

前へ御取計奉懇願候也

日治遺弟 感應寺当住今井真澄九拜

艸山瑞光寺執事御中」(第二葉)

身延山大学仏教学部紀要第二十一号 令和二年十月

これによって、日治の弟子今井真澄が明治三十八年(一九〇五)九月二十九日、師日治の二十五回忌に際して、瑞光寺第十二世毘尼薩台巖(一八二九〜一九〇九)のもとに本書を納めたことが知れる。

今井が「御山内に納め下され候はば、野柄は勿論、故先師も満足に思はれんと愚推仕り」と記すように、日治と瑞光寺乃至平樂庵との間には深い関係が認められる。それはまず日治が村上勘兵衛の次男であったという点である。⁽³²⁾平樂庵は村上家第三代宗信が深草の地に構築した庵であり、そこにおいて元政との道交がより一層深められていった。⁽³³⁾その後、いつ頃からか定かでないが、この平樂庵は学寮として瑞光寺本堂からは北西の地に所在していたように、日治は本妙日臨(一七九三〜一八二三)が平樂庵に在ることを聞いて訪ね、法門を聞き大いに得るところがあったという。日臨が波木井に移った後も、その元を訪れ法義を問うている。さらに明治四年九月、日臨五十回忌に際しては村上治兵衛に図って法華経寺を建て大いに法会を修したという。⁽³⁴⁾ここから、日治の日臨に対する極めて強い追慕の念がうかがえ、その出自とも相俟って、今井は瑞光寺に日治所持の書物を納めたものと考えられる。

今井が師有縁の地に、報恩・菩提のため、師所持の書物を奉納した事例は、この他にも複数みられ、このような経緯によって『宗祖一代本尊鑑』は瑞光寺に所蔵されるに至ったといえる。実際に、明治四十二年十月に作製された『艸山文庫調書』には、「宗祖一代本

尊鑑 壹冊³⁷⁾の記載があり、その後瑞光寺の宝物として現在に伝わってきたことが確認できる。

三、瑞光寺本の内容について

(一) 瑞光寺本の構成―広本との対照―

まず、瑞光寺本の内容構成について確認したい。広本と対照しながらその構成について記すと【表一】のようになる。

身延山久遠寺所蔵の『御本尊鑑』（正本）は三十四幅の大曼荼羅

が配列されているのみだが、瑞光寺本及び広本はそれに加えて複数の項目を確認することができる。なお、瑞光寺本における丁数の飛びは白紙の箇所を示す。また、広本の書誌については、『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』によれば、「菊くずしの金欄の表紙の和綴し本で、長さ二九・三種 九寸八分、巾二一・〇二種 約七寸³⁸⁾」である。本稿では広本は身延山大学附属図書館所蔵の複製本によったため、『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』の表記にしたがって、その紙数を「面」と表記した。

瑞光寺本と広本を対照しながらその内容をみていくと、まず、①

【表一】

瑞光寺本（『宗祖一代本尊鑑』）	広本（亨寿日観『宗祖本尊録』）
	表題（一面）
	四大天王（二面）
	表題（一面）
① 四大天王（二丁裏）	四大天王（二面）
② 大曼荼羅三十二幅（二丁表～十七丁裏）	大曼荼羅三十幅（三十面）
	（他筆）大曼荼羅等（七十二面）
	大曼荼羅二幅（二面）
③ 正中山法花経寺御霊宝目録（十八丁）	正中山法花経寺御霊宝目録（二面）
④ 大曼荼羅一幅（日頂上人御形木写）（十九丁裏）	

⑤ 大曼荼羅一幅（上総妙本寺靈宝之内）（二十丁表）	大曼荼羅一幅（上総妙本寺靈宝之内）（二面）
⑥ 不動愛染感見記（二十一丁裏～二十二丁表）	不動愛染感見記（二面）
⑦ 聖人御系図御書（二十三丁表～二十五丁裏）	聖人御系図御書（二面）
⑧ 身延五世日台聖人夢想記（二十六丁）	身延五世日台聖人夢想記（二面）
⑨ 譲渡 春乙丸（二十七丁）	譲渡 春乙丸（三面） ³⁸
⑩ 題目点図一通（二十八丁表）	題目点図一通（二面）
⑪ 八吉祥神咒経（三十二丁表～三十七丁裏）	（日観筆）大曼荼羅（三面） 見静日禅奥書（二面） 每日回向文（二面） （日恕筆）識語（二面）

※同内容の項目には下線を引いた。

「四大天王」の見出しのもと、その呼称と配置について記され、「亭私云」としてそれに対する釈が述べられている。広本では、表題が二つあり、はじめ「四大天王」について二面にわたって記されるが、再度表題を掲げた後には瑞光寺本と同じく一面に書写されている。⁴⁰

次いで、瑞光寺本では、日蓮聖人の大曼荼羅三十四幅の内、三十二幅の写しが載せられ、③「正中山法花経寺御霊宝目録」の書写が続く。そして、半丁分の白紙を挿んで④大曼荼羅一幅（日頂上人御形木写）が、さらに一丁分の白紙の後、⑤大曼荼羅一幅（上総妙本

寺靈宝之内）の写しがみられる。詳細については後述するが、②④⑤の大曼荼羅計三十四幅は、配列の異なりはあるものの、『御本尊鑑』と合致している。広本では、④の書写がみられず、計三十三幅となっているが、瑞光寺本と配列は全く同じである。ただし、瑞光寺本でいう②の三十幅の後に、日蓮聖人の大曼荼羅等の写しが七十二面三十六紙にわたって挿入されている。この三十六紙について、『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』では、この箇所のみが縦二七・〇糎であって、全体より約二・三糎短くかつ料紙も異なること、また日

観の筆跡とは認められないことから、他書の混入であるとして⁽⁴⁾いる。瑞光寺本と広本の最大の違いはここに認められよう。

③「正中山法花経寺御霊宝目録」は、中山法華経寺に所在した宝物目録の大曼荼羅部分を抜粋したものと考えられ、法華経寺所蔵の大曼荼羅十三幅について記されている。瑞光寺本と広本では細かい点において若干の相違がみられるものの、基本的には一致している。本目録については、『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』において広本の写真版と翻刻が掲載され、その史料の価値の高さに触れている。⁽⁴³⁾

以下、⑥「不動愛染感見記」、⑦「聖人御系図御書」、⑧「身延五世日台聖人夢想記」、⑨「讓渡 春乙丸」、⑩「題目点図一通」までは、瑞光寺本・広本ともに基本的に一致する。瑞光寺本の⑥は不動・愛染の図には省略がみられるが、本文は『昭和定本日蓮聖人遺文』一六頁所収の真蹟と全同である。⑧⑨は、広本の写真版と翻刻が『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』に掲載され、『身延山史』等と比較して大同なるも所々異なることが指摘されている。⁽⁴⁴⁾ただし、⑦「聖人御系図御書」については、先述の通り、広本では「亨私云」以下が省略されている。⑦⑧⑨ともに瑞光寺本と広本では行詰・字数に異なりがみられ、そのためか、広本の本奥書で「亨私云ヨリ三丁不写之」と記された箇所が瑞光寺本では二丁分となっており合致しない。

また、瑞光寺本では最後に⑪「八吉祥神咒経」が六丁にわたって

記されるが、これも先述の如く、広本では省略されている。広本の本奥書に「八祥咒経 末、以上六十有之、是も不写」とある通りだが、「六十」は「六丁」の誤記であろうか。この点若干の疑問は残るものの、以上が瑞光寺本の構成内容である。したがって、⑦の「亨私云」以下、並びに⑪は、特に新出史料といえよう。

これに対して、広本では、さらに「従是補」云々と、日観自身が拝した日蓮聖人の筆と伝わる大曼荼羅を書写し、「右者伊豆伊東海光山仏現寺霊宝之／高祖之真蹟之本尊ト云々、寛政六甲寅／六月廿六日参詣之砌住持省富院日秀／開披之奉拝者也」と記している。広本は寛政四年霜月の書写であるから、本書書写後に新たに追記されたものと考えられる。さらに、見静日禪の書写奥書、「毎日回向文」、そして、末尾に明治四十二年十月に裏打ち等の修理がなされた識語が堀之内妙法寺第十九世深厚院日恕によって記されている。

以上の内容より、広本には日観の書写後にいくつかの挿入がなされているが、基本的にその構成は瑞光寺本と一致しており、同系統本であることがわかる。これまで、『御本尊鑑』と広本のみが存在しか知られていなかったため、両者の関係性について言及がなされてきたが、広本は『御本尊鑑』を正本として書写されたものではない、ということが指摘できよう。

少なくとも『御本尊鑑』とは別の、瑞光寺本系統の日亨による大曼荼羅の臨写をはじめとする諸記録の書写がまとめられたものが存在し、それが見静日禪書写本の原本となり、日禪書写本からの転写

本が亨寿日観書写の広本であったことがわかる。広本には確かに他書の混入（この点については、後述する）と日観自身による追記がみられるが、全体の内容構成については大きな乱れはなく、日禪の書写奥書を有するという点で特に貴重な史料といえる。

（二）大曼荼羅三十四幅の配列―『御本尊鑑』との対照―
次に、②④⑤にみられる大曼荼羅三十四幅について考察を進めていきたい。まずは、これら三十四幅の配列についてである。瑞光寺本収録の大曼荼羅の配列を基準として、身延山伝来の霊宝目録記載の大曼荼羅及び『御本尊鑑』と対照を行うと次のようになる。

【表二】

番号	凶顕年月日	名称、授与者等	亨	奠(二)	奠(一)	遠	乾	鑑
①	弘安四年十一月	真之首題大漫荼羅	同	同	同	同	同	②③
②	建治元年十一月	胎藏界金剛界大日等ノ御勸請	同	同	同	同	同	⑧
③	文永十年七月八日	佐渡始頭大曼荼羅	同	同	同	同	同	①
④	弘安三年十月	俗日用	同	同	同	同	同	②①
⑤		紺紙金字、泥筆青蓮華御本尊	⑦	⑦	⑧	⑧	⑥	②④
⑥	弘安	文字損欠	⑧	同	⑦	⑦	⑤	③④
⑦	建治二年九月	絹地	⑤	⑤	⑤	⑤	⑨	⑤
⑧	弘安三年二月	童男福満	⑤	⑥	②②	①①	④	⑤
⑨	弘安三年五月十八日	沙門日命	⑥	同	①①	①③	⑩	⑥
⑩	弘安四年四月五日	僧日伝	⑨	⑧	同	⑫	⑦	②②
⑪	文永十一年十一月	同日三幅（寂仙房）	②②	①⑦	①③	①⑤	①⑤	②
⑫	文永十一年十一月	同日三幅	②③	①⑧	①④	①⑥	①⑥	④
⑬	文永十一年十一月	同日三幅	②④	①⑨	①⑤	①⑦	①⑦	③

右【表二】で用いた略称は左記の通りである。

亭…三十三世遠沾院日亨『西土藏宝物録』（亭師目録⁴⁵）正徳二年（一七一二）冬

奠(一)…二十八世妙心院日奠『甲州身延山久遠寺蓮祖御真輸入函次第』（奠師目録⁴⁶）万治三年（一六六〇）十二月朔日

奠(一)…二十八世妙心院日奠『甲州身延山久遠寺蓮祖御真輸入函次第』前半部分（遠師目録書写⁴⁷）

遠…二十二世心性院日遠『身延山久遠寺蓮祖御真輸入函之次第』（遠師目録⁴⁸）慶長十年（一六〇五）四月十一日

乾…二十一世寂照院日乾『身延山久遠寺御靈宝記録』（乾師目録⁴⁹）慶長八年（一六〇三）十月十五日

鑑…遠沾院日亨『御本尊鑑』

瑞光寺本についてみると、まず身延山所蔵の二十四幅の書写があり、次いで佐渡妙宣寺所蔵の三幅、中山法華経寺所蔵の五幅、日頂上人授与の形木写一幅、そして保田妙本寺所蔵の一幅という順で、所蔵場所ごとに配列されていることが確認できる。瑞光寺本全体の構成についてはすでに触れたが、全体の三十二番目までは白紙部分を挿むことなく続けて書写され、^{③②}の後に「正中山法花経寺御靈宝目録」の写しがあり、半丁分の白紙を挿んで、^{③③}が載せられる。そしてさらに一丁分の白紙を挿んで、^{③④}保田の大曼荼羅と『不動・愛染感見記』の写しがあり、半丁分の白紙の後に身延山所蔵の諸記録の写しが続く。大曼荼羅以外の記録が間に入るといふこともあろうが、ここから所蔵場所ごとの区切りを示す意図がうかがえる。^{③⑤}

瑞光寺本所収の身延山所蔵分の二十四幅は、亭師目録記載の第一長持の内、第一函から第四函に納められる大曼荼羅二十四幅と一致している。^{③⑥}①から④の大曼荼羅は、亭師目録に至るまでのすべての

目録において第一函目に納められており、目録記載の順と瑞光寺本の配列が一致する。しかし、それ以降の配列については、どの目録とも一致せず、その関連性を見出すことは難しい。

亭師目録の成立は正徳二年冬であり、広本の本奥書「身延山久遠寺第三十三世日亨上人正徳二壬辰年六月九日此卷御写被遊候也」に従えば、瑞光寺本系統の日亨自筆本は、目録作成に先立って作成されたこととなる。大曼荼羅についての目録では、二十八世日奠による奠師目録が亭師目録に最も近く、奠師目録には日亨の書入がみられることから、日亨は奠師目録をもとに宝物の整理・書写等を行ったことが推測される。だが、奠師目録と瑞光寺本の配列は異なっており、少なくとも大曼荼羅の書写においては、直接的な繋がりをみることはできない。

近世中期以降作成されるようになった靈宝目録は、住持交代の際の宝物引き継ぎの証文としての役割を有していたといふ。^{③⑦}中山法華

経寺の靈宝目録、寛永九年（一六三二）九月二十四日付、第二十二世日窓代の『正中山法花経寺御靈宝之惣目録』、文政八年（一八二五）六月良日付、第九十五世日亮代の『正中山本妙法華経寺御靈宝目録鑑』も、このような目的で作成されたものであり、成立時期が右両目録の間に位置付けられる瑞光寺本収録の「正中山法花経寺御靈宝目録」も同様の意図をもつものと考えられる⁽⁵¹⁾。実際に、三つの目録記載の大曼荼羅は、数、名称、配列と基本的には一致していることが確認できる⁽⁵²⁾。

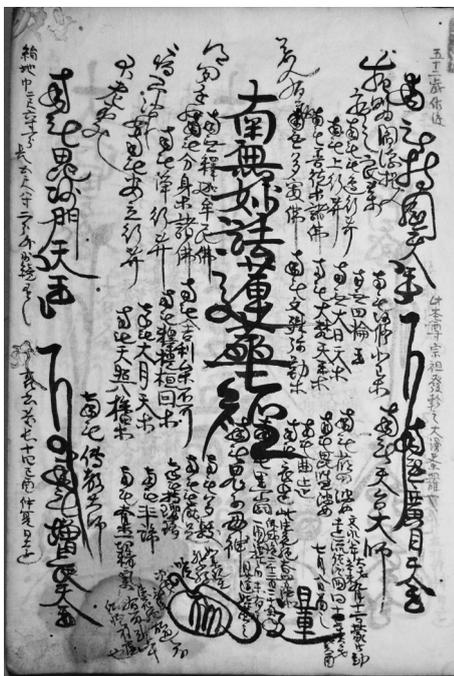
その一方で、身延山伝来の大曼荼羅についての宝物目録は、近世初期からみられるが、乾師目録とその僅か二年後に作成された遠師目録との間においても、幅数、配列等に異なりがみられる。さらに、遠師目録から五十五年後に作成された奠師目録では、やはり遠師目録との間に、幅数、配列ともに相違がある。日奠は遠師目録をもとに宝物の整理等を行ったものと考えられるが、自ら目録を作成した万治三年十二月朔日に、遠師目録に対して「以暹師御改箱入日記帳別二新二記／置此目録ハ一向不候間不可致正者也」と書入を行っている。また、自身が書写した遠師目録（奠^(一)）にも、「万治三年十二月朔日改別二／帳并箱入直究故二／此帳不可為正者也」と右と同内容の書入がみられる。これによれば、日遠の目録作成後、第二十六世智見院日暹（一五八六～一六四八、一六二八年晋山、寂年まで在山二十二年）が箱の入れ換え等を行っており、遠師目録は現状に一向に合わないものとなっていた。よって現状の箱入に基づいて

目録を改めた故に、遠師目録によるべきではないというのである。

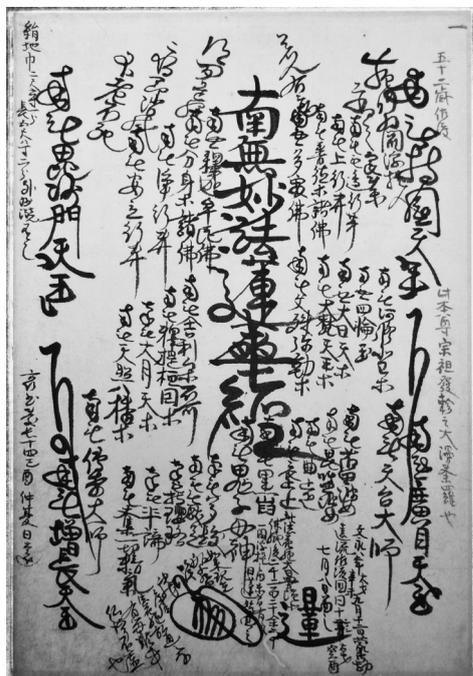
このような事例から、僅かな期間においても身延山においては歴代住持によって箱の入れ換えが行われていたことが確認でき、奠師目録から五十年余りを経た日亨の代に至るまでも様々な変化があったことが推測される⁽⁵³⁾。第一函はいずれの目録でも同じ順序で記載がなされ、瑞光寺本においても一致していることから、少なくとも日亨は第一函の第一に記される「真題目御曼荼羅」から書写をはじめていき、第二函以降も当時の収蔵状況に基づきながら書写を続けていったのではなからうか。日亨は黒塗美麗の大長持ち新調にもなつて箱の入れ換えを行い、目録を改めたということからも、日亨の大曼荼羅書写の配列と目録記載の配列について、現状からは単純にその関連性を指摘することは難しいといえよう。

（三）『御本尊鑑』収載の大曼荼羅との関係

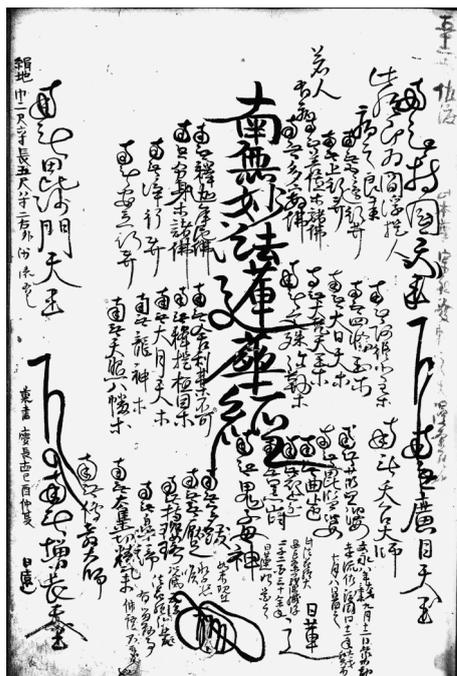
瑞光寺本収録の大曼荼羅は、『御本尊鑑』収載の大曼荼羅と非常によく似た筆致で書写されており、日亨の筆とにわかには区別がつき難い。写真版での本史料全体の紹介は別稿に譲るが、本項において後にも言及することとなる始頭本尊を一例として挙げておきたい。なお、広本における大曼荼羅書写には、かなりの省略がみられ、また正確に臨写したとは言い難い点も多く認められる。始頭本尊においても同様のことがいえ、『御本尊鑑』・瑞光寺本と併せて掲載しておきたい（写真資料⑤⑥⑦）。



写真資料⑥



写真資料⑤



写真資料⑦

- (写真資料⑤) 『御本尊鑑』所収「始頭本尊」(身延山久遠寺所蔵本)
- (写真資料⑥) 『宗祖一代本尊鑑』所収「始頭本尊」(深草瑞光寺所蔵本)
- (写真資料⑦) 『宗祖本尊録』(広本) 所収「始頭本尊」(身延山大学附属図書館所蔵複製本)

さて、日亨筆写の『御本尊鑑』については、先行研究においてすでに種々の言及がなされており、その特徴として挙げられるのが、写誤の可能性が少なくないという点である。山中喜八氏は日蓮聖人（図頭の大曼荼羅に関する総合的な研究において、他の大曼荼羅と対照を行う中で、『御本尊鑑』のみみられる特異な表記、及び日亨の「写誤或いは失」かと思われる表記を指摘している。また、寺尾英智氏も日等筆臨写本との対照の上に同様の指摘をしている。

そこで、ここでは、瑞光寺本と『御本尊鑑』両者の関係について

考察を進めるためにも、先行研究において指摘される箇所に基づき、瑞光寺本の表記について検討を行っていききたい。

1、両者の共通点

このような視点から、先行研究における『御本尊鑑』に対する指摘をまとめ、瑞光寺本における同異を示すと次の【表三】のようになる。

【表三】

	番号	先行研究における指摘	瑞の表記
1	① ③	阿修羅王のみ存して龍王を闕くが、『妙宗先哲本尊鑑』によれば、左方第二段大月天王の次位に「南無龍神」とあり、恐らくは日亨師の誤脱かと思われる。 ⁶¹⁾	同上
2	③ ⑬	愛染明王の種子に、仰月点を闕いている。或いは亨師の写誤か。 ⁶²⁾ 身延曾存、文永十一年十一月同日三幅の内、この一幅のみが「分身等諸仏」を闕いているのは、考うべきであろう。 ⁶³⁾	同上
3	⑩ ⑳	亨師の模本には大日天王を闕き、本尊鑑（『妙宗先哲本尊鑑』）には日月両天ともに存せず。両つながら写誤を疑わしめる。 ⁶⁴⁾ 不動明王・愛染明王の種子、四天王のうち下方の広目天王・增長天王、大日天王の諸尊が、日等筆臨写本には記されているが日亨筆写本には記されていない。日亨筆写本の写誤と考えてよからう。 ⁶⁵⁾	同上
		日亨筆写本では讃文を「仏滅度後二千二百二十余年之間一閻浮提之内未曾有大曼荼羅也」とするが、日	同上

右【表三】の最上段は通し番号を、「番号」の上段は『御本尊鑑』の配列を、下段は瑞光寺本の配列を記し、「瑞の表記」は瑞光寺本において、『御本尊鑑』に対する指摘と一致する場合は「同上」と、異なる場合はその表記を記した。

この対照から、両者に相違がみられるのは一箇所のみであり、先行研究において指摘される日亨の写誤と考えられる表記、及び『御本尊鑑』のみにみられる特異な表記が、ほぼ一致していることがわかる。

さらに、これらの点以外について、日蓮聖人図頭の大曼荼羅の特長や他の臨写本との対照から、両本に共通する特徴的な表記を確認すると、次の三点を挙げることができる。

- a、『御本尊鑑』①・瑞光寺本③（佐渡始頭大曼荼羅）について
 - ・日乾臨写本には「南無四輪王等」とあるが、『御本尊鑑』・瑞光寺本は「等」を欠く。
 - ・日乾臨写本には「蒙御勘気」とあるが、『御本尊鑑』・瑞光寺本は「氣」を欠く。
 - ・日乾臨写本では四天王すべてを「王」と記すが、瑞光寺本・『御本尊鑑』は南無広目天王のみ「玉」を用う。
- b、『御本尊鑑』⑬・瑞光寺本⑱について
 - ・自署「蓮」字の之の点を、『御本尊鑑』・瑞光寺本ともに欠く。
 - ・花押のワラビ手の空点が『御本尊鑑』・瑞光寺本ともに二つ

ある。

- c、『御本尊鑑』⑰・瑞光寺本⑰並びに『御本尊鑑』⑱・瑞光寺本⑱について
 - ・首題「蓮」字の之の点を、『御本尊鑑』・瑞光寺本ともに欠く。

日乾筆写本は真筆の書風を忠実に書写した臨写本で、真筆を髣髴させるに相応しいものである。首題「蓮」の之の点は真筆において一つ、二つ、三つの事例があるが、一つもないものはみられない。『御本尊鑑』⑰・瑞光寺本⑰は『妙宗先哲本尊鑑』巻二（二十五丁表）にも収録されており、そこには点が三つ記されている。

このように、両本にのみ共通する特異な例が多数確認できることから、『御本尊鑑』と瑞光寺本との間に深い関連性が見出せる。ことから、双方がともに日蓮聖人真筆の大曼荼羅から直接書写を行ったとは考え難く、日亨はまず真筆に基づいて書写した後、その書写本に基づいて再度書写を行ったものと考えられよう。

2、両者の相異点

以上は、両写本に主に共通する特異な表記であるが、両者には異なる点も若干見出すことができる。

【表四】『御本尊鑑』と瑞光寺本の相異点

	番号	『御本尊鑑』と瑞光寺本の表記	備考
1	① ③	『御本尊鑑』には「未曾有之」とあるが、瑞光寺本には「未有之」とある。 『御本尊鑑』には「南無四輪玉」とあるが、瑞光寺本には「南無四輪王」とある。	日乾臨写本は「未有之」 日乾臨写本は「王」
2	② ⑪	『御本尊鑑』には右上に朱筆で「五十三歳身延」とあるが、瑞光寺本には「五十三歳延山」とある。	
3	④ ⑫	『御本尊鑑』には右上に朱筆で「五十三歳延山」とあるが、瑞光寺本には「五十三歳身延」とある。	
4	⑤ ⑬	『御本尊鑑』には「後五百歳時、上行菩薩出現於世始弘宣之」とあるが、瑞光寺本には「後五百歳上行菩薩出現於世始弘宣之」とある。	真筆は「後五百歳之時、上行菩薩出現於世始弘宣之」
5	⑨ ⑭	『御本尊鑑』には自署の点が二つあるが、瑞光寺本は欠く。	
6	⑬ ⑮	『御本尊鑑』には「南無妙薬大師」とあるが、瑞光寺本には「南無妙薬大師」とある。	
7	⑮ ⑯	『御本尊鑑』には「巾二尺九寸二分」とあるが、瑞光寺本には「巾一尺九寸二分」とある。 『御本尊鑑』には「南無安立行菩薩」とあるが、瑞光寺本には「南無安立行菩」とある。 『御本尊鑑』には「正八幡宮」とあるが、瑞光寺本には「八幡宮」とある。	遠師・奠師目録は「横二尺」 山中氏は本大曼荼羅を真筆とすることに疑義を呈す ⁽⁷⁾
8	⑮ ⑯	『御本尊鑑』には「天照太神」とあるが、瑞光寺本には「天照大神」とある。 『御本尊鑑』には「一間浮提之内」とあるが、瑞光寺本には「一間浮提之内」とある。 『御本尊鑑』には自署の点が四つあるが、瑞光寺本には三つある。	
9	⑮ ⑯	『御本尊鑑』には「南無薬王菩薩」とあるが、瑞光寺本には「南無薬王菩薩」とある。 『御本尊鑑』には「釈大桓因大王」とあるが、瑞光寺本には「釈大桓因天王」とある。	
10	⑮ ⑯	『御本尊鑑』には「大日天玉」とあるが、瑞光寺本には「大日天王」とある。	真筆には両例みられる

11	②① ④	『御本尊鑑』には「南無文殊師利菩薩」とあるが、瑞光寺本には「南無文殊師利菩薩」と「利」を欠く。	
12	②⑧ ③③	『御本尊鑑』には「南無大迦葉尊者」とあるが、瑞光寺本には「南無大迦葉尊者等」とある。	『御本尊鑑』にはないが、瑞光寺本には「大毘楼博叉天王」の左脇に「弘安元年太才戊寅八月日」とある。

番号は【表三】と同じく、最上段に通し番号、「番号」上段に『御本尊鑑』、下段に瑞光寺本の配列を示し、両者の異なる点を挙げた。特に当該大曼荼羅に真筆・臨写本がある場合はその表記を記すなど、参考となる点について「備考」に記した。

右【表四】から、『御本尊鑑』の表記を正とするものもあれば、逆に瑞光寺本の表記を正とすべきもの、正誤の判断がつかぬ例もみられる。【表三】から、両本に共通してみられる最も多い写誤の例は、列せられた勧請諸尊等を欠くというものであることがわかる。また、「未有」を「未曾有」としたり、「仏滅後」を「仏滅度後」と記したりと、定型の表現などにつき、一字付加される例も確認される。その一方で、真筆或いは他の臨写本にない諸尊等が誤って記されるという事例はみられない。それに対して、【表四】の12番目の表記では、瑞光寺本では記されている図顕年次が、『御本尊鑑』では欠くという、大きな違いがみられる。

このような日亨の書写の特徴から、両者に深い関連性がみられる

『御本尊鑑』と瑞光寺系統本（これが日亨自筆本か否かは別として、この系統の本を指す）の、どちらが先に御真筆から直接書写を行ったものであるかを推測するならば、【表三】の9番『御本尊鑑』②・瑞光寺本④【表四】の12番『御本尊鑑』②⑧・瑞光寺本③③の事例から、瑞光寺系統本を先と考えるのが妥当であろう。

瑞光寺本は、それぞれの所蔵場所ごとに大曼荼羅が配列されており、かつ身延山所蔵分が、少なくとも宝蔵第一の函から進められていったことがうかがえること、さらに『御本尊鑑』が諸山所蔵の大曼荼羅を総合的にみて、年次順に配列していること、これらの点から、日亨は瑞光寺系統本の写本をもとに整理作業を行い、『御本尊鑑』を作成したものと考えられる。

このような見解に立つならば、これまで広本の本奥書によって、正徳二年六月九日としてきた『御本尊鑑』の成立についても、これは瑞光寺系統本の写本の成立を意味するもので、『御本尊鑑』自体のそれはさらに下ることとなる。

四、おわりに

以上、本稿では、新出資料である深草瑞光寺所蔵『宗祖一代本尊鑑』について、その書誌と伝来及び内容構成について史料紹介を行うとともに、三十四幅の大曼荼羅に着目し、『御本尊鑑』並びに広本との関連を中心に少しく考察を行った。最後に、瑞光寺本の存在を踏まえた上で、本稿のはじめにでも述べた『御本尊鑑』と広本両者の相異点及び広本自体の問題点として先行研究において指摘されてきた、配列の問題と広本への他筆大曼荼羅の付加という点について若干の検討を加え、結びとしたい。

この二つの問題は、相互に関連して指摘がなされているが、まず、『御本尊鑑』と広本において配列が著しく異なることについては、これまで論じてきた中ですでに答えが出されているものである。名称の問題及び表題の重複については、今後さらなる検討を要する課題となるが、亨寿日親書写の配列は現在の広本においても少しも乱れることなく正しく伝わっており、瑞光寺本と全同である。問題はやはり、身延山所蔵の大曼荼羅三十二幅の配列の中に他筆の大曼荼羅が混入してしまっていることであろう。ただし、七十二面に及ぶ他筆の混入は、必ずしも広本の価値を下げるものではない。

今回、他筆挿入箇所を検討を行ったところ、そのすべてが『妙宗先哲本尊鑑』巻二からの書写であることが明らかとなった。書写の

際に甚だしく省略した箇所が認められ、また配列についてもかなり入り乱れており、『妙宗先哲本尊鑑』掲載の順序とは大きく異なっているもの⁽²⁵⁾の、基本的に一致している。如何なる目的でここに『妙宗先哲本尊鑑』から大曼荼羅等の記録を挿入したのかは定かでないが、広本では、日親が寛政四年に日禪書写本から臨写を行った後、寛政六年に自ら実見した伝日蓮聖人筆の大曼荼羅を補っていることから推測すると、多くの聖筆大曼荼羅を蒐集する意図をもってなされたものかもしれない。

広本において参照された『妙宗先哲本尊鑑』については、『日蓮宗宗学章疏目録』では、勇猛院日麿の著作中に三巻として刊行されたことが記されているが、明治十七年(一八八四)に刊行された『妙宗先哲本尊鑑』は二巻本、刊記に編集者を村上有信、校定者として勇猛院日麿を挙げ、いずれも「故」の字を付している。勇猛院日麿(一七五七―一八二四)を著者とすると文政七年までの成立となるが、詳細についてはあまり知られていない。本文をみていくと、「果山一元乍恐愚案二云」⁽²⁷⁾「果山鹿考二云」⁽²⁸⁾「果山一元カ愚慮二云」⁽²⁹⁾等といった表記が多く目につき、「果山」なる人物が本書の成立に少なからず関わっていることが予想される。ただ、如何なる人物であるかは不明であった。それが、広本における『妙宗先哲本尊鑑』の書写では、「果山」を「杲山」と、複数箇所において記していることがわかった⁽³⁰⁾。広本の表記にしたがって、「杲山一元」とすると、文化文政期まで活躍し数々の業績を今に伝える法華経信仰者金子直

徳(一七五〇〜一八二四)の存在が浮かび上がってくる。

金子直徳は江戸雜司ヶ谷に居を構え、自らが発願者となり、宗祖五百遠忌にあたる天明元年(一七八一)には現在身延山上の山大光坊に所在する相輪塔の建立⁽⁸²⁾、文政二年(一八一九)には麻綿原の初日山大日天堂妙法生寺建立に尽力している。また、『日蓮宗宗学章疏目録』には、直徳の著として『世俗断金弁惑論』を挙げており、この他にも文学者・俳人として著作を残している⁽⁸³⁾。妙法生寺建立にあたっては紀州徳川家からも寄進を受けていること、また勇猛院日麿とは同年代に活躍した人物であることなど、篤き信仰と深い見識を備えた直徳が『妙宗先哲本尊鑑』成立に関わっていたことが十分に考えられるのである⁽⁸⁴⁾。

このように、広本は日亨『御本尊鑑』、また瑞光寺系統本の成立と展開を知るのみならず、『妙宗先哲本尊鑑』の成立についても知り得る重要な資料であることが指摘でき、今後、原本を用いたさらなる研究調査が望まれる。

最後に、瑞光寺系統本の流布について触れておきたい。ここで問題としてきた『妙宗先哲本尊鑑』には、日亨の大曼荼羅書写についての言及がみられる。たとえば、【表三】の通し番号七番、瑞光寺本・『御本尊鑑』ともに第十七番の大曼荼羅には、「日亨勸請少違也⁽⁸⁵⁾」と注記がなされている。この記載のみでは、瑞光寺系統本、『御本尊鑑』いずれを参照したか判然としないが、『妙宗先哲本尊鑑』巻一の「題目点図一通」の項目においては、さらに次の記載がみられる。

正徳二年壬辰六月九日於身延山日朝尊御染筆奉書写之延山有宝庫日亨筆也⁽⁸⁶⁾

『妙宗先哲本尊鑑』の凡例等に、日亨の本尊鑑の類を参照したということは記されていないが、右の文言は、瑞光寺本の「題目点図一通」書写の末尾に「日朝紙筆延山有之、正徳二壬辰年六月九日奉写之日亨」とあることに合致する。このことから、『妙宗先哲本尊鑑』を編集するにあたっては、日亨書写の大曼荼羅部分のみを有する『御本尊鑑』ではなく、大曼荼羅とともに身延山所蔵の諸記録をも併せ持つ瑞光寺本系統の日亨書写本が用いられていたことがわかり、瑞光寺系統本は後の大曼荼羅研究に対しても大きな影響を与えていたことがうかがえるのである。

本稿では、瑞光寺所蔵『宗祖一代本尊鑑』についての史料紹介と若干の考察にとどまったが、身延山伝来の諸記録等については別稿に譲り、また写真版での史料紹介も検討している。本史料の書写者、名称の問題等、残された課題は多い。今後さらに検討を重ねていきたい。

註

(1) 立正安国会編『御本尊集』(立正安国会、一九五二年、一九九〇年改)に二七幅の日蓮聖人真蹟の大曼荼羅が影印され、さらに中尾堯・寺

尾英智編『図説日蓮聖人と法華の至宝』第一卷曼荼羅本尊（同朋舎メディアプラン、二〇一二年）にて、『御本尊集』未収録の六幅を含む五十一幅のカラー図版が収載されている。

(2) 『日蓮宗宗学全書』第二卷二二一―二二八頁。

(3) 山中喜八氏は「一尊四士と大曼荼羅―その三大秘法との関係について―」（同『日蓮聖人真蹟の世界 上』雄山閣、一九九二年、四四三頁。初出は一九六四年）において、この六十五幅のうち、真蹟の現存するものは十一幅で、この比率を準用すれば、聖人は少なくとも七百有余の大曼荼羅を図頭授与されたとすると指摘している。

(4) 日乾書写の佐渡始頭本尊一幅が京都本満寺に所蔵される。従来、遠沾院日亨の写本が知られていたが、近年、真蹟を彷彿とさせるにより相応しいものとして、その図版が紹介されている（立正大学日蓮教学研究所編『本満寺宝物目録』本満寺、二〇一〇年、口絵一四頁、解説二八三頁）。

(5) 中山法華経寺所蔵の日蓮聖人の大曼荼羅を日等が臨写したものが京都頂妙寺に六幅所蔵される。詳細については、寺尾英智『日蓮聖人真蹟の形態と伝来』（雄山閣、一九九七年）五一―九七頁を参照。なお、日等筆の六幅の内一幅については、山中喜八『日蓮聖人真蹟の世界 上』二五四―二五五頁においても図版と翻刻が載せられている。

(6) 音馬実蔵編『本妙日臨律師全集』（平楽寺書店、一九四二年）巻頭に、弘安三年三月日図顕童男福満授与の大曼荼羅一幅が収載されている。この大曼荼羅については、山中喜八『日蓮聖人真蹟の世界 上』

二五二頁においても諸本を対照する中で言及がみられる。なお、従来あまり知られていないが、日臨は始頭本尊の書写も行っている。早くは、稲田海素氏によって「始頭本尊の」原形をしのぶものとしては深見要言居士の本尊鈔の巻頭に掲載されているものがあるが光明点は一向不明である。他に遠沾亨師や本妙臨師の筆写が現存する」（同稿『日蓮聖人の本尊について』『法華』第三四卷第二号、一九四七年、六頁）云々と、その存在が指摘されており、林是幹「本妙日臨上人の阿毘縁山行について」（『棲神』第五二号、一九八〇年）一〇頁においても言及がみられる。始頭本尊を含む本妙日臨書写の日蓮聖人図頭本尊については、筆者においても調査を行っており、これについては別に紹介を行いたい。

(7) なおこの他に、山中喜八氏は始頭本尊の写本に遠沾院日亨とともに、荒居養寿師のものが現存することを指摘している（同稿「一尊四士と大曼荼羅―その三大秘法との関係について―」四四二頁）。

(8) 藤井教雄編『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』（身延山久遠寺、一九七〇年、一九九九年再版）例言。

(9) 『日蓮宗事典』一〇五頁。

(10) 藤井教雄編『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』一九九頁。

(11) 右同例言、二〇二頁。

(12) 右同一九七―二〇二頁。

(13) 右同一九九頁。

(14) ここでは、株式会社高橋写真によるマイクロフィルムの紙焼きを

製本した身延山大学附属図書館所蔵『宗祖本尊録』によった。ただし読点は私に付した。藤井教雄編『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』では、見静日禅（三拝／敬白）までが翻刻されているが（二〇二～二〇三頁）、以下の二行は省略されている。

(15) 従来、広本に、

寛政四壬子霜月吉辰

宗祖本尊録（勅賜衣紫初祖／身延山三十三世）日亨上人写

日観臨写之

宗祖本尊録遠沾院日亨上人直筆写

日観（花押）

とあることから、『御本尊鑑』を正本として写されたのが、広本であるとしてきた（藤井教雄編『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』一九七～二〇〇頁等。『日蓮宗事典』『御本尊集』の項目も『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』の解説に基づく）が、この本奥書から、また後述する内容からも日亨自筆本を原本とした臨写とはいえないであろう。身延山久遠寺所蔵『御本尊鑑』を底本或いは正本と称することもこの認識から出るものと思われる。

(16) 『調査研究報告』第三三号、国文学研究資料館、二〇一三年。本稿は、国文学研究資料館による調査の途中段階での報告書だが、平成九年にはじめられた調査は二十数年を経て、平成三十年三月をもってすでに終了している。

(17) 右同一一九頁。

(18) 表紙への墨書書入は、後のものと考えられる。

(19) 表紙見返しにある「雪溪子日義」と同じ花押。

(20) 身延山久遠寺編『身延山史』（身延山久遠寺、一九七三年）一九二頁「日裕師の伝」による。

(21) 立正大学日蓮教学研究編『日蓮宗宗学章疏目録』（東方出版、一九七九年）二〇〇頁。

(22) 領玄寺の墓塔については、川上大隆・都守基一（「翻刻」遠沾院日亨上人国字年譜）（『日蓮仏教研究』第四号、二〇一〇年）「解題」に図版と翻刻が載せられている（二二八～一三二頁）。また、満願寺の画賛は、『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』の口絵に図版が掲載され、翻刻もなされている。これらは同文であるが、若干文字の異同があることが指摘されている。詳細については、右（「翻刻」遠沾院日亨上人国字年譜）の解題を参照されたい。

(23) 『身延山坊跡録』は、身延山坊跡録編集委員会編『身延山坊跡録（身延山支院、一九九四年）』によった。日義については、「山本房」歴世の項（『身延山坊跡録 上』六十二丁裏）並びに「名僧部」（『身延山坊跡録 下』七十五丁裏）に記載がみられる。『坊跡録』では、「山本房」「本院」と記されている。

(24) 奥野本洋「通師門人学禅院と身延宗徒」（『身延論叢』創刊号、一九九六年）八八頁。ただし、如何なる資料に基づいたか、出典が不明。

(25) 奥野本洋「通師門人学禅院と身延宗徒」九〇頁参照。この墓碑には弟子と孫弟子の名が刻まれており、弟子の一人に本國院日義を確認

することができる。なお、奥野氏は、見静日禪を杉之房第十七世本靜院日禪（宝暦九年化）と推定している（九三頁）。

(26) 『日宗新報』第三五卷第五二九号（明治二七年五月一八日発行）所収。

(27) 右同六頁。

(28) 日蓮宗寺院大鑑編集委員会編『日蓮宗寺院大鑑』（大本山池上本門寺、一九八一年）五一頁。

(29) 「日向尊者世家」『本化別頭仏祖統紀』（本満寺発行『日蓮宗全書』

本による）二二二頁。

(30) 『妙宗先哲本尊鑑』第二卷三十三丁裏。

(31) 本文にて後述するように、本書と一具で瑞光寺に寄贈された『推邪弁正録』にも「真院日治蔵」の印とともに「本宗／向門統領／第四」の印がみられる。

(32) 自成一院日宣誌「日治上人伝」五頁。田中智学『ひとの面影』田中智学自伝第十卷（師子王文庫、一九七七年。初版は一九三六年）の「村上勤兵衛」の項目においても、日治はこの家のお出であること、また「近古説教名家」であることが記されている（四五〇頁）。

(33) 平楽庵の成立、また村上家と元政の関係については、冠賢一「近世日蓮宗出版史研究」第二章「法華宗門書堂 村上平楽寺」（平楽寺書店、一九八三年）に詳しい。

(34) 身延山大学附属図書館所蔵『瑞光寺十二世台巖履歴略記』による。妙長寺文庫貴重本 資料No.15（棚番17―6）。本書三三丁裏に「明治三十年六月十二日出願茶室建設是モト平楽ノ庵ニテ本堂ノ乾ノ方ニ在ル地

所北陰湿地ニテ破損早クシテ永ノ存ノ見込無シ故此処へ移転再建スモト学療ナレトモ茶室トス」とあり、現在は茶室として客殿と宝蔵の間にある平楽庵が、明治二十年に移転する以前には学寮としてあったことがわかる。また、深草瑞光寺を訪れた本妙日臨が文化十三年（一八一六）四月九日に認めた書状「朝田薩庵に与ふる書（其四）」にも「此節城外伏見深草瑞光寺内平楽庵と申学寮に罷在候」（音馬実蔵編『本妙日臨律師全集』一六〇頁）とある。

(35) 日臨と日治との関係はいずれも『日宗新報』所載の「日治上人伝」（六・七頁）による。この伝記中にはその時期は記されていないが、日臨が平楽庵に寄宿したのは、文化十二年（一八一五）冬から文政三年（一八二〇）春にかけてであり、この年深草を離れ身延に戻り、文政五年の五月まで波木井の醒悟園に住した。

(36) たとえば、第五十七世究竟院日舜代に隨身を、第六十五世普恬院日桂代に院代をつとめた身延山久遠寺には、「親教師一真院日治聖人菩提也ノ感心寺什 弟子中納之」云々とある奥書をもつ『内典塵露章』一冊（身延文庫典籍目録編集委員会編『身延文庫典籍目録 下』身延山久遠寺、二〇〇五年、二九〇頁）、「今井真澄所秘」云々の奥書をもつ『一真日治尊者筆蹟』一冊（右同五七五頁）が所蔵される（なお『宗祖一代本尊鑑』には、「普恬院日桂」と判読できる方形朱印が捺されている）。また、その関係については未詳だが、貞松蓮永寺には今井真澄によって、師の菩提・追福作善のために、一真院日治蔵の書籍が複数納められたことが確認できる。その一例を挙げると、A12/159『科註

- 妙法蓮華経』には、『宗祖一代本尊鑑』と同じ「真院日治蔵」の朱印があり、卷一之上表紙見返しには「為／師一真院日治聖人字巨舜／真澄日彰（印）」と、裏表紙見返しには「先師日治和尚／追福作善」、卷二之上表紙見返し背面には「師範一真院日治聖人御菩提也／真澄日彰」等と墨書されている（立正大学図書館所蔵・貞松蓮永寺寄贈本。番号は立正大学図書館の資料請求番号）。その他、同様の記載は、『A11/98』法華玄義私記』、A12/375『天台円宗四教五時西谷名目』、A04/124『鷹峯郡譚』等（いずれも立正大学図書館所蔵・貞松文庫寄贈本）にみられる。
- (37) 身延山大学附属図書館所蔵本による。資料No.17（棚番17―6）妙長寺文庫貴重本に配架。本書の記載によれば、表紙を含め全七十七丁、漢籍・和本・仏書・雑書の一五九二点を載録する。その内、『宗祖一代本尊鑑』は「ろ号」の分類として六丁裏に記される。全体の一三〇点目にあたる。
- (38) 一つの項目ごとに丁が改められているが、この箇所のみ日台聖人夢想記の丁の最後に見出しを含む二行が追いつままれて記されている。よって、三面としたが実質二面分の記載である。
- (39) 藤井教雄編『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』一九九〇―二〇〇頁。
- (40) 藤井教雄編『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』では、「表題が二枚あることから別々の本を合本したものではなからうか」（一九九頁）と考えて、以下内容を検討している。
- (41) 藤井教雄編『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』一九九〇―二〇〇頁。
- (42) 寺尾英智『日蓮聖人真蹟の形態と伝来』五六頁参照。
- (43) この他、寺尾英智『日蓮聖人真蹟の形態と伝来』五六―五七、九三頁においても、本目録についての言及がみられる。
- (44) 藤井教雄編『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』二〇四―二〇九頁。
- (45) 日亨の『西土蔵宝物録』は、立正大学日蓮教学研究会編『昭和定本日蓮聖人遺文』第三卷（身延山久遠寺、一九五四年）に収録され、亨師目録として知られているが、一部のみの記載で第三長持以下は省略されていた。この宝物録は、「当山歴代等漫茶羅録」「宝蔵并中央之間廊下拝殿一切経堂 古仏堂録・会合所位牌録・方丈位牌堂録・書写并摺写経録」とともに一冊に合冊された目録として、正本が身延山久遠寺に伝わっており、その全体の翻刻が望月真澄氏によって『東洋文化研究所所報』第二号・第三号において紹介されている（望月真澄「翻刻身延山久遠寺身延文庫蔵『西土蔵宝物録』」「当山歴代等漫茶羅録」「宝蔵并中央之間廊下拝殿一切経堂 古仏堂録・会合所位牌録・方丈位牌堂録・書写并摺写経録」「東洋文化研究所所報』第二号、一九九八年。同続、『東洋文化研究所所報』第三号、一九九九年。さらに、望月真澄・木村中一編『身延山資料叢書二 目録集二』（身延山大学東洋文化研究所、二〇二二年）において、同目録の全体が写真版にて紹介されている。
- (46) 山川智應『日蓮聖人研究』第二卷（新潮社、一九三二年）において一部翻刻がなされていたが、その後、常円寺日蓮仏教研究会編『奠師法縁史』（全国奠統会、二〇一六年）に、目録全体の写真版と翻刻が収録されている。
- (47) 『奠師法縁史』に収録。同書では、日奠が身延晋山（万治三年四月

二八日) 後まず着手した事業として、靈宝の確認作業を挙げ、「奠師の靈宝整理は、遠師の目録をもとにはじめられたようで、現存の『遠師目録』には処々に奠師の書き入れがある。奠師は次いで、遠師目録を全文書き写し、さらに新たな目録を作成した。かくて万治三年(一六六〇)十二月朔日、『甲州身延山久遠寺蓮祖御真輸入函之次第』一冊三十六丁が完成した(四四〇頁)と述べている。確かに、遠師目録を書写するという形を取っているが、遠師目録記載の本尊とは配列に異なりがみられることから図表に加えたものである。

(48) 山川智應『日蓮聖人研究』第二卷、『昭和定本日蓮聖人遺文』第三卷に収録。さらに、寺尾英智編『身延山資料叢書一 目録集一』(身延山大学東洋文化研究所、二〇一一年)にて目録全体を写真版にて確認することができる。

(49) 山川智應『日蓮聖人研究』第二卷に収録。本目録も寺尾英智編『身延山資料叢書一 目録集一』にて目録全体が写真版にて紹介されている。

(50) もちろん、瑞光寺本が亨師直筆本の書写本であるならば、その時に白紙部分が挿入された可能性も考えられるが、全体の大きなまとまりとして所蔵場所によって配列されていることが先述の如くわかる。なお、③の日頂上人授与の形木写一幅については、「中山法華経寺御靈宝目録」中にも記載がみられる。しかし、他の中山法華経寺所蔵の五幅については、みな朱筆で「中山」と紙面の右上に記されているが、③にはそれがみえないこと、また、他の五幅がみな靈宝目録の前に配

列されているのに対して、③は目録の後に半丁分の白紙を挿んで記載されていることから、中山のものとは区別されていることがうかがえる。よって、所蔵場所並びに日亨の書写地は不明である。藤井教雄編『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』「例言」に『御本尊鑑』は日亨が「身延山秘蔵の日蓮大聖人御真筆の大曼荼羅の内、由緒正しい廿四幅と正中山法華経寺蔵の内五幅、阿仏房妙宣寺蔵の内三幅、上総妙本寺蔵の内一幅等の卅四幅を臨写して」と述べる「等」は、この一幅を指す。

(51) 亨師目録では、第一長持の合計を「曼荼羅 二十五幅/消息 十六幅」(五丁裏、望月真澄・木村中一編『身延山資料叢書二 目録集二 四一頁)云々と記しているが、正確には曼荼羅二十四幅、消息十七幅である。三函八幅の内、一幅は消息であるが、これを曼荼羅として数えたものと思われる。

(52) 乾師目録・奠師目録(一)・亨師目録はこの四幅のみを第一函に納める。ただし、遠師目録には、この四幅の他に当山興起の御消息一幅を加える(「元和元年(二六一五) 修補之節加入一函」とある)。奠師目録(一)においても第一函の箇所に同様の記載がみられるが、右脇に「御消息桐ノ三箱へ入八ノ内」と書入がみられる。

(53) 圭室文雄「解説」(『鎌倉市史』近世史料編第二、吉川弘文館、一九八七年)六一〇頁。

(54) 寺尾英智『日蓮聖人真蹟の形態と伝来』五五―五六頁参照。広本収録の「靈宝目録」の成立時期について、寺尾氏は「この記録の成立年次は明らかではないが、本文中に「日養云」とある日養は法華経寺

二八世鶴林院日養（二八世在住は寛永一九年（一六四二））と考えられる。また、「日秀云」とある日秀は法華経寺三八世興学院日秀（三八世在住は寛文六年（一六六六）八月二十七日〜同十二年（一六七二）八月二十七日）と考えられる。さらに、『宗祖本尊録』が書写されたのは寛政四年（一七九二）であることから、おおよその成立年次は推定されよう。（同書九三頁）と述べている。本目録が日亨自筆本に収録されていることから、正徳二年（一七二二）以前の成立といえよう。

- (55) 冠賢一・寺尾英智「史料紹介（14）日悦御手前二有之御霊宝・中山霊宝之注文・正中山御霊宝目録・正中山法花経寺御霊宝之物目録・正中山本妙法華経寺御霊宝目録鑑」（『日蓮教学研究所紀要』第一四号、一九八七年）。寺尾英智「日蓮聖人真蹟の形態と伝来」五六頁。

(56) 『冥師法縁史』四四〇頁。

- (57) 遠師目録一丁表。寺尾英智編『身延山資料叢書一 目録集一』四八頁。

(58) 『甲州身延山久遠寺蓮祖御真翰入函次第』二丁表。『冥師法縁史』二四八頁。

(59) 大曼荼羅の出入については、第四函に納められ伝来していた波木井日教授与の大曼荼羅が、三十二世日省代に水戸君に寄進されたことが確認できる（亨師目録四丁表、望月真澄・木村中一編『身延山資料叢書二 目録集二』三九頁）。

(60) 藤井教雄編『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』「例言」。なお、日亨晋山の三年後、宝永四年（一七〇七）大地震（富士山噴火）により身延

山内は大損害を蒙り、諸堂の復興に尽力する中、同七年西土蔵が改築されている。

(61) 一見してわかるのが、左上部の讚文が欠けていることであり、また日亨『御本尊鑑』の一つの特徴ともいえる「南無竜神等」の欠如が、なぜか広本では記されている。

(62) 山中喜八『日蓮聖人真蹟の世界 上』一九、六〇頁。

(63) 右同七八頁。

(64) 右同。

(65) 右同一三四頁。

(66) 寺尾英智『日蓮聖人真蹟の形態と伝来』六九〜七二頁。

(67) 右同七二頁。

(68) 山中喜八『日蓮聖人真蹟の世界 上』一三〇頁。ただし、これは日亨の写誤ではなく、本大曼荼羅自体の真偽についての指摘である。

(69) 右同一九四頁。

(70) 右同一九二頁。

(71) 右同二五二頁。

(72) 右同二六四頁。

(73) 右同二二、二四八頁。

(74) 寺尾英智『日蓮聖人真蹟の形態と伝来』六七頁。

(75) 山中喜八『日蓮聖人真蹟の世界 上』一三〇頁。

(76) この間に、亨寿日観が後補した大曼荼羅（【表一】の（日観筆）大

曼荼羅)の一分が重複して挿入されているという問題もみられるが、あくまで複製本によった見解であるため、原本に基づいた精査をしていかなければならない。

(77) 日蓮教学研究所編『日蓮宗宗学章疏目録』二二六五頁。

(78) 『妙宗先哲本尊鑑』巻一、二二丁表。

(79) 右同八丁表。

(80) 『妙宗先哲本尊鑑』巻二、三三丁裏。

(81) 広本四八面、七五面、八一面。

(82) 『身延山史』一二二五頁に「即如院一相師の願業に基き、遠忌の報恩

記念として相輪塔を新たに建立せり」とある。この「相輪塔」については、山梨県南巨摩郡身延町教育委員会編『身延山久遠寺史料調査報告書』(山梨県南巨摩郡身延町教育委員会、二〇〇四年)に詳細な調査報告がなされているが、本報告書の解説では、造立趣旨を謹述した即如院一相日是の事蹟に関しては管見に触れる資料がなく分明ではないとし(二八五頁)、金子直徳に関しては別に触れている。この点、本相輪塔の各銘文との関連性も含め再考の余地がある。なお、相輪塔建立の寄進者の中には、深見要言の名もみられ、大田南畝を含めた三者の関連についても言及がみられる(海老澤了之介『新編若葉の梢―江戸西北郊郷土誌』新編若葉の梢刊行会、一九五八年、三四―三五頁)。

(83) 妙法生寺の建立の記録をはじめ、直徳の生涯等の事蹟については、海老澤了之介『新編若葉の梢―江戸西北郊郷土誌』を参照。本書において、直徳について詳細な研究がなされているが、『妙宗先哲本尊鑑』

についての言及はみられない。

(84) 『日蓮宗宗学章疏目録』三四八頁。ここでは、「真徳」の名で掲載され、「一作真海。金子氏。俗称理平次。東都雜司ヶ谷之人。」と記されている。なお、金子直徳は、幼名を竹次郎、次に民次郎・貞次郎、後に理平次と改めている。俳名を宗周、また杲山・一相・紫磨子等と称した(海老澤了之介『新編若葉の梢―江戸西北郊郷土誌』四九頁)。直徳を真徳と改めたのは文化六年(一八〇九)六十歳の時であるから(同五〇頁)、これにしたがえば、『世俗断金弁惑論』の成立もこれ以降のこととなる。

(85) 海老澤了之介『新編若葉の梢―江戸西北郊郷土誌』三―一頁参照。

(86) なお、『妙宗先哲本尊鑑』には、初日山妙法生寺所蔵の大曼荼羅三幅、東京雜司ヶ谷光明寺所蔵の大曼荼羅一幅を収載しており、やはり関連性がうかがえる。特に、妙法生寺所蔵の大曼荼羅は、復興後納められたものと考えられるならば、『妙宗先哲本尊鑑』の成立は文政二年以降となる。直徳の事蹟との関連も含めて、本書の成立については今後の課題としたい。

(87) 『妙宗先哲本尊鑑』巻二、二四丁裏。

(88) 『妙宗先哲本尊鑑』巻一、五丁。

(89) ここには瑞光寺本『宗祖一代本尊鑑』を所持していた一真院日治と村上家の関係、或いは一真院日治が村上家を通して本書を入手した可能性もあり、今後さらに検討を行っていきたい。

〈キーワード〉日蓮、大曼荼羅、本尊、御本尊鑑、妙宗先哲本尊鑑、日乾、日亨、日臨、日覺、金子直徳、瑞光寺

〈付記〉小稿作成にあたり、資料の調査と掲載を許可して頂いた、身延山久遠寺、元政庵瑞光寺第十五世川口智康上人の格別の御芳情に甚深の謝意を表します。